
 シンポジウム 5

膀胱癌の診断・治療 Game Changers

司 会	松 山 豪 泰 (山 口 大)
	井 上 啓 史 (高 知 大)
演 者	菊 地 栄 次 (聖マリアンナ医科大学)
	福 原 秀 雄 (高 知 大)
	松 本 洋 明 (山 口 大)
	藤 井 靖 久 (東京医科歯科大)
	西 山 博 之 (筑 波 大)

司会のことば

長きにわたり新たな展望が開けなかった膀胱癌診療は、ここ数年では大きく動き始めた。本シンポジウムは、『膀胱癌の診断・治療 Game changers』という難しいテーマではあったが、まさに大きく変貌を遂げつつある膀胱癌診療において Game changers となりうる診断・治療法をシンポジストの先生方にご発表いただいた。

まず、菊地栄次先生（聖マリアンナ医科大学）は「BCG-failure CIS の治療における game changer への期待と課題」というタイトルで、BCG unresponsive に対する新規薬物治療への期待と課題をご講演いただいた。Game changer となりうる薬剤としてペムブロリズマブや Adstiladrin (IFN α 2a 組み換えアデノウイルスベクター) が示された。また今後の新規薬剤使用にあたり、効果予測のための新規バイオマーカーの重要性を強調された。

次に、福原秀雄先生（高知大学）は「上部尿路上皮癌に対する 5-アミノレブリン酸を用いた光力学診断」というタイトルで、ALA-PDD の歴史的背景やメカニズムを含め、最新の上部尿路癌診断法と将来展望をご講演いただいた。自施設の前向き試験では上部尿路上皮癌（特に CIS）に対する ALA-PDD は感度 100%、特異度 50% と良好な治療成績が示された。

松本洋明先生（山口大学）は「進行性 UC 治療の Game Changer-今後の ICI 適応拡大と ICI 不応への戦略」というタイトルで、進行性尿路上皮癌治療における ICI の適応拡大と post-ICI の戦略をご講演いただいた。特にシ

スプラチンが使用できない転移性/進行性尿路上皮癌に対する 1st line 治療としての免疫チェックポイント阻害薬（ICI）の臨床試験結果やプラチナ製剤による 1st line 治療で効果が持続する症例に対する ICI 治療の良好な臨床試験結果（JAVELIN Bladder100）が示され、2021 年には進行性 UC 治療の Game changer となるとのことであった。

藤井靖久先生（東京医科歯科大学）は「大きく変わる膀胱癌診療：game changers としての膀胱温存療法と MRI 診断」というタイトルで筋層浸潤膀胱癌に対する膀胱部分切除術を併用した 4 者併用膀胱温存療法（TeMT）の良好な治療成績とその治療前診断としての MRI 検査の重要性をご講演いただいた。特に通常の TMT（3 者併用膀胱温存療法）では浸潤性局所再発や所属リンパ節再発が約 20%にみられることや術前 MRI における拡散協調が異常な症例ほど TeMT が有効であるという結果は興味深かった。

最後に、西山博之先生（筑波大学）は「ゲノム病理：尿路上皮癌治療選択における game changer」というタイトルで尿路上皮癌におけるゲノム病理の現状と将来展望をご講演いただき、純粋な尿路上皮癌とは発現遺伝子が異なる variant histology に対する個別治療の必要性やリキッドバイオプシーによる ctDNA（循環血液中の腫瘍由来 DNA）の有用性を強調された。そのなかでエビデンスに基づいたデータの評価が重要であり、遺伝子占いであってはならないというコメントが印象的であった。